

浄土の十樂

『往生要集』源信（九四二〜一〇一七）より

「それ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か帰せざる者あらん。」

一 聖衆来迎の樂

「第一に、聖衆来迎の樂とは、およそ悪業の人の命尽くる時は、風・火まらず去るがゆえに動熱にして苦多し。善行の人の命尽くる時は、地・水まらず去るがゆえに緩慢にして苦なし。いかにいわんや念仏の功つもり、運心年深き者は、命終の時に臨んで大いなる喜おのずから生ず。しかる所以は、弥陀如来、本願を以ての故に、もろもろの菩薩、百千の比丘衆とともに、大光明を放ち、皓然として目前にまします。時に大悲觀世音、百福莊嚴のみ手をのべ、宝蓮の台をささげて行者の前に至りたまひ、大勢至菩薩は無量の聖衆とともに、同時に讚嘆して手を授け、引接したまう。この時、行者、目のあたり自らこれを見て、心中に歡喜し、身心安樂なること禪定に入るがごとし。当に知るべし、草庵に目をとずるときはすなわちこれ蓮台にあなうらを結ぶときなり。即ち弥陀仏の後に従い、菩薩衆の中にありて、一念の頃に、西方極樂世界に生まるることを得るなり…そのときの歡喜の心は言を以て宣ぶべからず。」

二 蓮華初開の樂

極樂世界に生まれ、初めて蓮華が開く時、自らの身体が金色に輝いているのに気づく。仏の光明を見て清淨の眼を得、法音を聞く。弥陀如来二菩薩の御姿、聖なる修行者たちの御姿、景色とよい音声とよい、勝妙ならざるものなし。歡喜の心、幾ばくならんや。

三 身相神通の樂

身体は金色に輝き内外ともに清淨。天眼・天耳・宿命・他心・神足の神通力を具す。

四 五妙境界の樂

一切の万物、美を窮め妙を極めたり。見るところ、悉くこれ淨妙の色にして聞くとところ、解脱の声ならざることなし。香・味・触の境も亦またかくの如し。

五 快樂無退の樂

西方極樂世界は、樂が失われることなし。また生老病死の苦しみもなく、心・事相応すれば愛別離苦なく、慈眼もて等しくみれば、怨憎会苦もなし…

六 引接結縁の樂

この世にあつては求むるところ、意の如くならず。人もまたしかり。極樂に生まれれば悟りを開き、知恵と神通力によって縁ある人々より一切衆生に至るまで極樂世界にすくい導くことができる。

七 聖衆俱会の樂

仏や菩薩、聖者たちと常に俱にすることができる。

八 見仏聞法の樂

今この娑婆世界は、仏を見たてまつりて法を聞くこと、甚だ難し。しかるにかの国の衆生は常に弥陀仏を見たてまつり、恒に深妙の法を聞く。かくの如き法樂、またいずれの処にかあらんや。

九 随心供仏の樂

心のままに仏に仕え供養することができる。

十 増進仏道の樂

今この娑婆世界は、道を修して果を得ること甚だ難しいが、かの世界では弥陀仏のもと自然に仏道増進して悟りに至ること叶う。のちこの世に還り、悩める人々を導かん。弥陀仏の大悲本願の如し。かくの如き利益、また樂しからずや。